

社会意識とユダヤ人像 : 宗教の視点から見たシャイロック

著者	高尾 利数
出版者	法政大学社会学部学会
雑誌名	社会労働研究
巻	43
号	1・2
ページ	65-83
発行年	1996-11
URL	http://doi.org/10.15002/00006519

社会意識とユダヤ人像

— 宗教の視点から見たシャイロック —

高尾 利数

シェイクスピアの最も良く知られ、広く上演される劇の一つ『ヴェニスの商人』のなかで、強欲で冷酷非情な高利貸しとして描かれるユダヤ人シャイロックの悪役像は、作者自身が意図したか否かにかかわらず、ユダヤ人⁽¹⁾についての一つの典型的なイメージとして、世界中にあまりにも広く深い影響を与えてきている。この問題を、宗教の問題として考察するという視点から検討してみたい。

1 『ヴェニスの商人』のなかでのシャイロックの役割

わたしは、多くの評者とともに、この劇は基本的には喜劇であると思う。そしてまず、その枠組みのなかでシャイロックを理解すべきであると思う。「新潮文庫」版の『ヴェニスの商人』の訳者福田恆存氏も「解説」のなかで言っている。「私たちはシャイロックを『ヴェニスの商人』の額縁から外に連れだしてはならない……エリザベス朝時代の人物としてシャイロックの存在を考えてみなければならぬ」と。さらに氏は述べている。「クイラークーチの言葉をそのまま借りれば、シェイクスピア当時の英国はユダヤ人をひどく排斥した時代であって、彼自身おそらくユダ

ヤ人をろくに見たことがないのではないかというのである。また、そういう時代であったから、エリザベス朝時代の人々は、貴族と一般市民との別なく、ユダヤ人を蔑み憎み、人でないの扱いをしていて、少しも省みることがなかったのである」と。

この「新潮文庫」版のもう一人の解説者である英文学者中村保男氏も言っている。「シャイロックは、なによりもまず、喜劇中の悪役という役割をふりあてられた人物なのであり、他の登場人物たちは（それに観客も）そのように彼を扱っているのである。彼はみずから設けた冷酷の畏にみずからはまりこむ滑稽な鼻つまみ者なのだ。この芝居が書かれた当時の英国では、ユダヤ人は入国を禁止されており、悪どい高利貸しも道徳的に忌避されていた。その風潮をシェイクスピアは利用したまでなのである」と。

一喜劇のなかの悪役としてのシャイロックの役割は、まさにその通りであると思う。そうであるならば、シェイクスピアが、この劇を通じて、ユダヤ人を侮辱しようとしたとか、逆に、ハイネが言ったようにシャイロックを通じてユダヤ人を擁護しているなどというのも基本的に間違っているであろう。そういう意味では、中村氏の次のような指摘は適切であると思う。「シャイロックはあくまでも喜劇の枠内で彼独自の強烈さをもって生きている。第三幕第一場でサレアリオーたちにむかって叩きつける皮肉な毒舌は、辛辣で生気に溢れ、彼の心情を吐露した巧みなしっぺいがえしである。ユダヤ人を目の敵にするキリスト教徒を非難して彼は言う――

『あの男、おれに恥をかかせた、（中略）おれの仲間を蔑み、俺の商売の裏をかく、（中略）それもなんのためだ？

ユダヤ人だからさ……ユダヤ人は目なしだとも言うのですかい？（中略）同じものを食ってはいないと言うのかな？（中略）何もかもクリスト教徒とは違うとも言うのかな？（中略）ひどいめに会わされても、仕かえしはず

るな、そうおっしゃるんですかい？（中略）クリスト教徒がユダヤ人にひどいめにあわされたら、御自慢の温情はなんと言いますかな？ 仕かえしとくる。それなら、ユダヤ人がクリスト教徒にひどいめに会わされたら、われわれの持ちまへの忍従は、あんたがたのお手本から何を学んだらいいのかな？ やっぱり、仕かえしだ。（後略）」

シェイクスピアがユダヤ人を擁護しているという暴論がとびだしてくるのも、むべなるかなと思われるほど強い語調、巧みな修辭である。……喜劇の悪役にもこのような行動の〈深み〉を付与したシェイクスピアは、なんと大きな器量をもった劇作家であったことか。彼はおそらくユダヤ人の実物にお目にかかったことは一度もなかったのだろうが、それでも、このようなユダヤ人の一典型を見事に生かしているのである」と。

そういうわけで、一つの優れた喜劇としての『ヴェニス商人』のなかで悪役をふりあてられたシャイロックというユダヤ人高利貸しの姿を、この喜劇の枠からはずして拡大解釈するのは、本質的に間違っているというべきであろう。

2 背景としてのユダヤ人問題の重さ

しかし、福田恆存氏が、「エリザベス朝時代の人々は、貴族と一般市民との別なく、ユダヤ人を蔑み憎み、人でのしの扱いをしていて、少しも省みることがなかった」と述べている当時のイギリス社会、ひいてはヨーロッパ社会全体のユダヤ人一般に対する偏見と差別の問題は、深刻であり重大な問題である。それに、冒頭で述べたように、この

喜劇は最も成功した作品として、現代に至るまで全世界で広く上演され、そのため、隠に陽に無数の人々に「強欲で冷酷非情なユダヤ人高利貸し」という固定観念を助長し増幅してきてしまっているという歴史的事実を考えてみると、単純に一喜劇のなかの悪役にすぎないというだけでは済まないであろう。そのことを、シェイクスピア自身の「罪」として彼を非難しても始まらないが、この偏見の拡大増幅について、彼が何の歯止めもしていなかったということは、今にして思えば、彼ほどの洞察力のある人物としては、やはりそれなりに批判されても仕方がないと言えるであろう。シェイクスピアが、こういう当時の風潮を「利用したまで」だとは言っても、やはり当時のこうした一般風潮は深く批判されなければならないであろう。だがもちろん、すでに中村氏によって引用された箇所のように、虐げられていたユダヤ人側の怨念のこもった心情を、シェイクスピアは深くえぐり出して表現しているのであるから、所詮は、この劇作を読み観る人々の側の思想と感性の問題だとも言えるのであろうが、やはり、この劇の背景としてのユダヤ人問題は深く考察しなければならない問題であろう。

それに、上に引用した福田氏の言葉には、続いて以下のような表現も見られるのであるが、それ自体がわたしには気になる。福田氏は、「……敵を愛することを信条としたキリスト教徒ではあったが、教祖を十字架にかけた敵だけは例外だった」と付け加えている。これは福田氏自身の理解なのか、当時のイギリス社会の人々の理解のことを言っているのか、氏の日本語の構造の曖昧さからして定かではないが、福田氏自身の理解のようにも聞こえる。そうであれば、日本人としての福田氏のなかにも依然として前提されている認識が問題とされなければならない。いずれにしても、こういう「理解」がそもそも重大な誤解・偏見に基づいていることを明らかにしておく必要があるであろう。

そもそも、伝統的な欧米のキリスト教徒であれば、「イエス・キリスト」のことを日本語で言う「教祖」とは表現

しないであろう。なぜなら、「教祖」という日本語には、その者が所詮一人の「人間」でしかないという理解が前提されているからである。正統的なキリスト教徒は、ナザレのイエスを一人のただの「人間」とは受けとっていない。そうではなく、「神の子」、いやさらに三位一体の神のなかの「御子」の位格にある「神」自身として信じているのであり、あまたある宗教のうちの一つであるキリスト教の「教祖」などとは受けとらず、そのように表現もしないのである。いわゆるキリスト教の「創設者」は、根源的には彼らの唯一絶対の「主」なる「神」そのものであり、「イエス・キリスト」は、その神から全人類のための唯一絶対で最終的な救いをもたらすべく唯一回この世に送られてきた「神の子」「救世主」(本来「油注がれた者」を意味するヘブライ語メシアのギリシア語訳)なのであり、単なる一つの宗教としてのキリスト教の「開祖」「教祖」などという「人間」ではないのである。こうして見ると、福田氏の言葉は、彼自身の理解を述べたものであろうと思われる。であれば、氏の「敵を愛することを信条としたキリスト教徒」という表現も気になる。キリスト教といえば、日本ではすぐに多くの人が、「愛の宗教」などと定義したがる。確かにイエスの言葉として、「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」(「マタイによる福音書」五：四四)という言葉が伝承されている。だがこの言葉が、具体的な状況を捨象した抽象的・普遍的な「真理」として語られたものではなく、支配者が作り出す「敵」という概念に抗うことを促す「逆説的」な表現として、支配者などが措定する「敵をこそ愛せ」と理解するほうが、イエスの本来の志向に合致するものだという田川建三の指摘に注目したい。実際彼は、世界的水準を抜く彼の著作「イエスという男」(三二書房)において、「(6) イエスは愛の説教者ではない」という項目を設けて、詳細な議論を展開している。「敵」一般を「愛する」などということは、まさに「所詮矛盾」ではない。「愛敵」という矛盾した表現を超越的真理として措定するならば、結局は絶望や偽善を生み出すだけであろう。詳しくは拙著『イエスとは誰か』(NHKブックス)のⅡの1「敵を愛せ」の項を見られたい。

ところが、伝統的・正統的キリスト教は、まさにこの「愛敵」を絶対的・普遍的「信条」として宣伝したので、真面目な人がそれを実践しようとすれば、絶望感へと追い詰められ、対極的な神の「絶対愛」による「救し」を独占する制度としての教会に永却回帰することを余儀なくされるし、支配者がそれを道具として用いれば偽善的な支配のための格好の武器となったり、その他の場合には広く偽善を生み出す根拠となったりしたのである。そしてまたキリスト教会は、今から二千年前のパレスティナに生まれ殺された大工の息子イエスを、唯一絶対の救い主キリスト、神の子、いやさらに「神」そのものとして信じ込むというドグマを絶対化し、そのドグマを無条件的に承認し受け入れることをもって「救済の条件」とし、このドグマをあらゆる人に押し付けてきたのである。そういう「押し付け」は、拒否に遭えば、たちまち憎しみに転化し、相手に激しい呪詛を叩きつけることとなる。そこから「神の子を十字架にかけた敵ユダヤ人だけは例外だった」などという歪曲された概念が生じてくるのであろう。言うまでもなく、イエス自身がユダヤ人であったし、初代の弟子も使徒もすべてユダヤ人であった。ところが、いわば「本家本元」のユダヤ人たちが総体としては、このようなキリスト教的ドグマを受け入れなかつた。そのため、不安にかられたキリスト教会が、ユダヤ人を「キリスト殺し」「神殺し」の罪を背負う者とし、それゆえ永遠に呪われた存在だなどという曲解を捏造し、ユダヤ人一般に対する憎しみを増幅させてきたのだともいえよう。

事実としては、イエスを殺したのはユダヤ人ではなく、ローマ人であった。もちろんユダヤ人の支配者たちは、イエスを殺すように仕向けたとはいえるであろうが、実際に処刑したのはローマ人であった。十字架刑というのは、ローマに対する叛逆罪の罪を犯した者に加えられるローマ刑法に基づく処刑方法であり、ローマ人だけが執行できる刑罰であった。だからこそ、イエスの「罪状書き」には「ユダヤ人の王」と記されていたのである。それにイエス自身もユダヤ人であり、「ユダヤ人がイエス・キリストを殺した」などというのは、後代の悪意に満ちた捏造にすぎない。

い。このことは、ごく最近になって、ローマ・カトリック教会がようやく正式にその非を認めユダヤ人に謝罪したという事実によっても裏書きされている。もっとも、これほどひどい歪曲を二〇世紀の終わりになってようやく承認したということ自体が、まったく恐ろしくひどい話なのであるが。

3 「金貸し業者」としてのユダヤ人像の発生

福田恆存氏は、「教祖殺し」のユダヤ人のことを述べたぐりに続いて、「金貸し業者ユダヤ人」のイメージについては、次のように述べている。「しかも、その敵のユダヤ人は昔から金貸し業として栄えていた。金を貸して利を得ることとは、キリスト教の道徳からはもちろん、さらに遡って古代ギリシアの道徳観からも、自然にたいする罪として卑しむべき行為と考えられていたのである。しかし、いかに金利を悪と考えても、金を借りねばならぬ事態は起こったし、金を借りれば当然金利の問題が生じてくる。……そこでキリスト教徒は良心を傷つけずに事を運ぶため、自分の罪を背負ってもらおう生けにえを必要とした。その生けにえの役をユダヤ人がみずから買って出た」と。

あまり揚げ足取りのような議論をしたくはないのだが、こういう解釈には重大な問題が潜んでいると思うので、その幾つかを明らかにしておく必要がある。「ユダヤ人は昔から金貸し業として栄えていた」という表現は、単なる客観的な描写としては間違っているとはいえないが、最後の「その生けにえの役をユダヤ人がみずから買って出た」という理解と結び付けると、あたかもユダヤ人一般が最初から希望して金貸し業に没頭してきたかのような印象を与える。それこそがひどい曲解であり偏見の所産である。事のより正確な把握のために、一例を挙げれば、大澤武男氏の『ユダヤ人とドイツ』（講談社現代新書）の「ユダヤ人の財と賤性」の項の「強いられて生きる道……金貸し

業……高利貸しユダヤ人像の成立」の箇所がある。そこには、ユダヤ人のことを「金貸し業」を「本業」とする者として最初に命名したのが、第二回十字軍を勸進した有名な修道士、クレールヴォーの聖ベルナルド（一〇九一年頃―一一五三年）であったこと、ユダヤ人にとって、金貸し業が選択の余地のない職業となったのは、一二一五年、第四回ラテラノ宗教会議が、キリスト教徒に利息を取って金を貸すことを厳しく禁止してからであったこと、さらにユダヤ人が公職から追放され、ほとんどすべての職業から締め出され、職工にもなれず、店も持てず、土地所有も禁止され、農業も許されず、遂に教会法の禁止に拘束されなかった金貸し業を選択せざるをえなかったことが克明に述べられている。大澤氏は警告している。

「このように、ユダヤ人の生きる道としての金貸し業は、彼等の自由意思によるものではなかったことを忘れてはならない」（三三頁）と。さらにそこには、ユダヤ人が金貸しを始める以前は、もっぱら修道院や各地の教会管区が金貸し業を営んでいたことや、「隣人愛と清貧を売り物にしていたフランシスコ修道会さえ、最初から年利四〜一〇パーセントを受けとり、……まさに高利貸し的存在となり、貧民を搾取する弊害が生まれていた」ことが述べられているのだ！

こうしてみると、福田恆存氏の「解説」自体が、欧米に広がっているあまりにもひどい偏見と歪曲を土台にしたものであり、シャイロツクのユダヤ人像の増幅にむしろ手を貸してしまうものであるとさえ言うほかあるまい。

4 シェイクスピアは、シャイロツク像の創造者ではないこと

『ヴェニス商人』が、シェイクスピアの完全な創造物ではないことは、よく知られている。このことは、上述し

た二人の解説者によっても詳しく説明されている。全体の構造は、一四世紀のイタリアのセル・ジョヴァンニの作『イル・ペコロネ』から得られているらしい。ユダヤ人像については、シェイクスピアに先立つロバート・ウィルソンの『ロンドンの三婦人』や、とりわけ先輩のクリストファー・マーローの『モルタ島のユダヤ人』（二五九二年）に暗示を得ているらしい。この劇は、そういうよく知られた素材を巧みに構成し直した「多層体」として、シェイクスピアの天才によって素材がさらに効果的に関連づけられた作品と言える。宗教という視点からこの問題を考察すれば、シャイロックに典型的に表現されているようなユダヤ人像が、ヨーロッパ社会において実に長い間に蓄積され伝承され固定化されてきたということの深刻さである。だから、シェイクスピアが『ヴェニス商人』におけるシャイロック像の創造者ではないことが、かえって重大な問題なのだと言わなければならないのである。なぜなら、シェイクスピアの意図の如何にかかわらず、この劇作の上演が成功すればするほど、シャイロック的なユダヤ人像が、さらに増幅されて後代にまで継承されていくことになったからである。

現代のユダヤ教徒であれば、シャイロック的なユダヤ人像がヨーロッパ社会においてあまりにも深く広く浸透してしまつたので、ヨーロッパの非ユダヤ人たちにおいてはもちろんのこと、ユダヤ人自身の間においてさえ、シャイロック的ユダヤ人像が定着してしまつたことを、深い悲しみと共に指摘するであろう。特に西ヨーロッパにおいて啓蒙主義が起こり、ユダヤ人の同化政策が顕著になり、ユダヤ人の間にもそれに呼応する「啓蒙主義的ユダヤ教」が起こつて、ユダヤ人の側からの同化運動が盛んになる時代になると、ユダヤ人自身の間においてすら、シャイロック的なユダヤ人像が受け入れられていったのである。一例として、カール・マルクスのユダヤ人像についての、多くのユダヤ人のアンビヴァレントな評価を紹介してみよう。

マルクスは、代々正統派のラビの家系に生まれたのであるが、彼自身は同化したユダヤ人の道を進み、ドイツ的教

養を受けて、思想的にはヘーゲル左派のブルーノ・パウアーのユダヤ人理解を批判的に継承していったと理解されている。パウアーは、キリスト教を批判的に評価し、キリスト教がなお宗教的にはあるが、「人間こそすべてであり、普遍者、全能者である」ことを告げていると言う。それゆえ、ユダヤ人は、キリスト教に改宗することによって解放されるのではなく、宗教そのものからの人間の解放に参与することによって解放されるのだと主張した。マルクスは、そうしたパウアーの理解を転換させて、「ユダヤ人問題に寄せて」を書き、その結論として、次のように宣言する。「ユダヤ人の現世的基礎は何か？ 実際の欲望、私利である。ユダヤ人の現世の祭祀は何か？ きたない商売である。彼らの現世の神はなにか？ 貨幣である。よろしい！ それではきたない商売からの解放が、したがって実際の現実的なユダヤ教からの解放が、現代の自己解放であるだろう」と。そして彼は、こうした視点から、史的・弁証法的唯物論を展開したのである。多くのユダヤ人から見ると、マルクスのこのようなユダヤ人観は、まさに「ヴェニス」的ユダヤ人観である。だから彼らの多くは、こうしたマルクスのユダヤ人観が、非常に偏ったものであり、ユダヤ人の本質を「利己主義」と捉えることなど歪曲以外のなにもでもないし、第一貨幣の把握もきわめて一面的であり、それらを土台とする経済的「解放」なるものが、宗教そのものからの解放などとはとうてい思えないと主張するのである。それに彼の資本制経済への批判が、産業資本によって編成された生産過程内部での剰余価値の問題へと深められていった際には、あの「ヴェニス」的ユダヤ人理解では、有効性を失ってしまったと見るのである。

むしろ圧倒的多数のユダヤ人は、マルクスが展開した資本主義経済体制への批判の有効性を一定程度認めるものの、彼の作業自体がユダヤ教そのものの止揚を必然化したとは考えないのである。むしろマルクス主義は、地上の楽園を形成するという希望とか、メシア的な救済の思考とか、終末的な新天新地の到来などのユダヤ教的理念が、世俗

的に展開されたものと映るのである。だから彼らの目から見ると、マルクス主義は、ベルジャイエフがつとに述べているように、宗教的メシアニズムの世俗版と映るのである。

いずれにせよ、ユダヤ人であったマルクスにおいてすらユダヤ人の本質が、「実地的な欲望、私利」を求め、「きたない商売」をし、貨幣を「現世の神」として生きることに見られたということは深刻な事柄である。こうした歪んだユダヤ人像が、特に近代ドイツにおいては一般化され、遂には、ナチス的な恐ろしいユダヤ人像へと収斂していったことには、このような不当に一般化されたユダヤ人像の蔓延が土台となっていたと言えよう。こうした歪んだユダヤ人像の形成と増幅、そして一般化に、『ヴェニス商人』のなかのシャイロツクのユダヤ人像が大きく「貢献」してしまったことは否定できないことであろう。

5 レッテル貼りと一般化の危険性

この劇作を通じて、キリスト教徒およびユダヤ教徒双方による実に多くのレッテル貼りが見られる。まずキリスト教徒によるユダヤ教徒のレッテル貼りであるが、「邪教徒」「悪魔」「犬」「人噛み犬」「異教徒」「畜生」などであるが、同時にユダヤ人を悪の権化として「相手はユダヤ人だ」「ユダヤ人め！」と一般化して罵倒する場面、あるいは「ユダヤ殿」「ヘブライ人」などと揶揄する場面が実に多い。人間を個人として独立し、それぞれ違った個性や思想や価値観を持った存在として見るのではなく、一把一絡げにしてレッテルを貼るという姿勢は、最も危険な姿勢である。こういう傾向は、すでに新約聖書の『ヨハネによる福音書』のなかで、「ユダヤ人」を一般化して「悪魔の子」と断定するという形で定式化されているものであり、後の「ユダヤ人」一般を断罪する際の古典的典拠とされてきた

のである。また新約聖書では、使徒パウロが、「ユダヤ人」に迫害されたという記事が、繰り返し語られるが、そのことも「ユダヤ人一般」に対する偏見や憎悪を生み出す源泉となったと言える。

キリスト教徒のそういう扱いに対抗して、ユダヤ教徒の側でもキリスト教徒に対してレッテル貼りが行なわれてきた。この喜劇においても、シャイロックが繰り返し口にして、「おれはやつが嫌いだ、キリスト教徒だから」、「やつはおれたち、聖なるユダヤ人を口の敵かたにして……」、「道楽三昧のキリスト教徒」、「キリスト教の阿呆ども」、「キリスト教徒にちよいと頭をなでられたくらいで……」などなどの表現である。

双方が相手を不当に一般化して誹謗し合うという点ほど、危険で不毛なことはない。われわれ日本人が、第二次世界大戦中に英米人を「鬼畜米英」などという表現で侮蔑したことの愚かしさ恐ろしさは、なお記憶に新しいことである。もちろん相手側も日本人を「ジャップ」などと呼んで応酬したのであるが。

それにしても、「ヴェニスの商人」のなかのキリスト教徒とユダヤ教徒の関係は、対等なものではなかった。前者の圧倒的優位のなかでのやり取りである。だから大前提として、ユダヤ人は悪で、キリスト教徒は善という断定が一貫している。こういう偏見は、この劇のなかではむしろ「善人」とされる商人アントーニオにおいて特に強いように思われる。彼は、シャイロックが少し「親切心」を見せたかと思ったとき、次のように語る。「あのヘブライ人、結構、キリスト教徒に改宗するかもしれない……親切気を出しはじめたからな」と。だから、シャイロックの娘のジェシカが、「親に似ず」優しく憐れみ深いと判断されると、キリスト教徒のランスロットは叫ぶのである。「異教徒にこんなかわいい子がいようか、ユダヤ人の娘にこれほどやさしい子が！キリスト教徒がいたずらをやらかして、こしらえた子でもなければ、どうしてこんな……」と。これは何とひどい偏見に根差した発言であろうか！

だが、こうした偏見は一六世紀に限られたことではなく、現代でも欧米社会のキリスト教徒たちの間には依然とし

て強く見られる独善的な断定である。わたしは、反核運動の先頭を切っているニュージールランドの真面目な、そしてそれなりに意識の高い女性のキリスト教会員の一人が、次のような疑問を真剣に提起しているのを読んだことがある。「日本でも、反核運動が盛んだと聞くが、キリスト教徒でも何でもない日本人が、どうしてそういう良い行為に関心を持つのでしょうか？」と！ わたしは、怒りを感じるよりも、冷水を浴びせられたような怖さを感じたものである。

さて、このような独断と偏見に基づく断定は、キリスト教徒においてだけではなく、当のユダヤ人のなかでもいつしか当然のように思い込まれてしまう。そのことは、シャイロックの娘ジェシカの言葉に繰り返し現われてくる。ジェシカは、上述したランスロットの言葉の直後に、次のように叫ぶ。「……けれど、同じ血を引く娘でも、心は別……ああ、ロレンゾー、もし約束を守ってくださるなら、……きつとキリスト教徒になってみせましょう！」と。またさらに他の文脈のなかでジェシカは言う。「あの人のおかげでキリスト教徒になれたのも！」と。そして、いよいよ最後の幕では、敗訴したシャイロックに対して加えられるキリスト教徒の「慈悲」は、彼にキリスト教徒になることを命じる（〜）ことなのである。周知のように、キリスト教もイスラームも共にユダヤ教のアブラハムに由来する。これら三つの「啓示宗教」が歴史を通じて争ってきている姿は実に情けない。そういう問題については、つとにレッスングの劇作「賢人ナータン」が、真の和解のための豊かな提言を行なっている。是非一読いただきたい。それについては、拙著『神学の苦悶』（伝統と現代社）の「正統思考の禍いとその止揚——『賢人ナータン考』を、また『ドイツ観念論』（弘文堂）の第一巻『ドイツ観念論前史』中の拙論「レッスングの宗教思想」を、さらにこれら三つの宗教の神観念については、K・アームストロング『神の歴史』（拙訳、柏書房）を参照されたい。

もうくどくどと書き連ねる必要はないであろうが、こうした思考の背後には、キリスト教徒は善であり、ユダヤ教徒は悪であるという何の根拠もない大前提が宿っているのである。こういう独善が、そしてキリスト教のドグマの絶対性へのもたれかかりが、ヨーロッパにおいて、十字軍、宗教裁判、異端審問、ユダヤ人狩り、魔女狩り、異教徒狩りなどが限りもなく行なわれてきた根本的理由なのであろう。

それでも、この時代のユダヤ人抑圧は、まだ「改宗」ということを通じてキリスト教社会に「同化」することが許されていた。これが後に、ナチス時代になると、「ユダヤ人」が生物学的に「人種」というえせ科学的観念をもって固定化され、いかなる意味でも「同化」不可能な種族とされ、「ジェノサイド」の対象とされた。それに比べれば、まだまだしであったとは言えるであらう。

6 現代の宗教事情とユダヤ人問題

現代はすでに「ポスト・キリスト教の時代」(Post-Christian Era)と呼ばれて久しい。現代では、心ある人々の間では、キリスト教という宗教も、一つの相対的なものであり、独善的・排他的に自分だけが唯一絶対の真理を保持しているなどという妄想は消えてしまった。もちろん、こうした根拠のない妄想にまだにしがみついているキリスト教徒も多いのであるが。(こういう問題への批判的検討としては、田川建三や八木誠一や滝沢克巳の諸著書および拙著『宗教幻論』や『テキストとしての聖書』(共に社会評論社)などを参照されたい。またキリスト教側のものとしては、まだ多くの限界のある思想であるとはいえ、ジョン・ヒックの『神は多くの名前を持つ』(岩波書店)などもある)。とにかく、現代までの聖書や宗教に関する批判的・歴史的研究などを真剣に考察するならば、「キリスト教唯一絶対主義」などという妄想は、

一日も早く克服されるべきものであることが明らかになるであろう。とはいえ、ナチスによるユダヤ人のホロコーストなどの恐るべき現実を知ってしまった世界は、かつてのユダヤ人迫害などを、あのような規模や酷さにおいて繰り返すことはまずないであろう。

それに、現代のユダヤ人は、特にアメリカ合衆国に完全な市民権を得て住んでいる多くのユダヤ人などは、なお多くの克服されるべき諸問題をかかえているとはいえず、かつてのような差別や迫害を受けてはいない。それに、イスラエルという国家の誕生は、いろいろ深い問題性を宿しているとはいえず、世界中の多くのユダヤ人に、一部はためらいを含みつつ、しかし、かつてない安定感や安心感や誇りを与えている。それに、アラブ諸国家との争いも僅かながら希望が持てるような方向が見え始めている。そういう意味では、ユダヤ人たちは現在、まずはアメリカ合衆国において、そして西側先諸進国において、かつてない平和と繁栄を享受していると言えるであろう。それは、かつての同化の方向ではなく、彼らの宗教や民族の独自性を失わずに、多元的社会的なかで、自らのアイデンティティを主張しつつ生きることが可能になっているということである。

それだけではない。ユダヤ教徒たちは今や、「ポスト・キリスト教の時代」のなかで、ユダヤ教がキリスト教と違って、人間の理性を犠牲にするような血による贖罪とか死人からの復活とか処女降誕などいろいろな奇跡に基づく無理なドグマを信じるようなことを要求せず、しかも人生の意味や歴史の基礎付けを可能にし、それゆえニヒリズムを克服し、さらに倫理を基礎付け、人間の共同社会に基礎を与える倫理的唯一神論を提供しうる宗教としての自信を強めつつある。そのような方向は、ハーマン・ウオークの『ユダヤ教を語る』（原題は「これが私の神だ」）や、デニス・ブレガー／J・テルシュキンの『現代人のためのユダヤ教入門』（共にミルトス）などに見られる。

もちろん現代の欧米社会には、反セム主義がいまなお根強く残っているし、最近ではネオ・ナチの動きも活発化し

ている。反セム主義があまり強く見られないという米英でさえ、そういう現実がある。フランツ・レーザー「ユダヤ人を生きる」(徳間書店)などが示す通りである。また現代イスラエルには、土井敏邦「占領と民衆」(晩聲社)が明らかにしているような酷さがあるし、それゆえアラブの詩人・ピアニスト、イブラヒム・スースの「ユダヤ人の友への手紙」(岩波書店)が訴えるように、イスラエルによる過酷な支配の実態があるのであり、自らがナチスによるホロコースの犠牲者でありながら、それになぞらえられるほどの「酷さ」を實行してしまっているのである。それゆえ、イスラエル人の内部からさえ強い批判もある。例えば、もとベギン首相顧問のイエシャファト・ハルカビの「イスラエル・運命の刻」(第三書館)が訴えるようにである。ハルカビは、イスラエルが、旧約聖書時代の神話に基づく「約束の地」イスラエルという時代錯誤的な幻想に固執し、「ナイル河からユーフラテス河までの〈大イスラエル〉などという「グランド・デザイン」を妄想することを戒め、善悪の形而上学的価値判断を基準とするのではなく、真に現実的な判断を貴び、国連が決議した線まで撤退すべきであると主張している。だがこのことは他方では、国連の中核にいた人物が、こういう意見を発表できること自体が、それなりの健全さを示しているともいえるであろうが。

7 ユダヤ人と日本人

最後に日本人とユダヤ人という問題に若干触れておきたい。日本には、昔から「ユダヤ謀略説」という類いのもの
がかなりあるが、それが一九八〇年代からまた復活し始めている。その新しい形の一つは、宇野正美の「ユダヤ人が
解かると世界が見えてくる」(徳間書店)である。また、ユダヤ人の知恵から学ぶとか、ユダヤ人の優秀性などを神秘
化して語る類いのものも多い。他方、ユダヤ人・日本人同祖論の類いの荒唐無稽なものもかなりある。そして妙に日

本人をユダヤ人と比較し、ユダヤ人と日本人の「特別性」だの「優秀性」だのを喧伝するものも多い。その最たるものが、イザヤ・ベンダサン（山本七平）の『日本人とユダヤ人』である。この書物は、浅見定雄氏の『にせユダヤ人と日本人』（朝日文庫）によって徹底的に批判されている。いまだに、山本七平のこの本が広く読まれているらしいが、そういう読者は是非浅見氏の批判を読んで欲しい。他方、いわゆる「ユダヤ学者」による妙なユダヤ人賛美の本もある。代表的なものは、手島郁郎氏の『ユダヤ5000年の秘伝書・世界を征服する「トーラ」の奇跡——逆境に勝つ権謀術数』（KKベストセラー社）である。浅見定雄氏は、この書物にも徹底的な批判を展開されているので、是非お読みいただきたい。（浅見定雄『聖書と日本人』晩聲社、「ユダヤ幻想の日本人論」の項）。こういった類いのものに対する優れた反論の一つは、宮崎正弘氏の『ユダヤにこだわると世界が見えなくなる』（二見書房）である。この反論を読めば、ユダヤ人がアメリカの政治・経済・軍事を支配しているなどという類いの話しがいかに根拠のないものであるかが明らかになる。

だいたい、妙にユダヤ人を特別視することは、背後に日本人をも特別視するという視点が潜んでいる場合が多い。もちろん、それぞれ独特な面があるであろうが、それはすべての民族にも多かれ少なかれ言えることである。そもそもユダヤ人を妙に特別視すること自体が、すでに彼らを差別することにつながるであろうし、日本人を特別視することは、他民族に対する日本人の不当で根拠のない優越感に発している場合が多いのである。それに、いわゆる安手のユダヤ人論の氾濫現象についても、浅見氏の『聖書と日本人』の「ユダヤ幻想と日本人」の項を是非お読みいただきたい。さらにユダヤ教全般のより深い理解のためには、滝川義人『ユダヤを知る事典』（東京堂）や、市川裕監修『ユダヤ人の二〇〇〇年』（同期舎出版）なども参照されたい。

『ヴェニス商人』のなかのシャイロック的ユダヤ人像をめぐって、いろいろ述べてきたが、ユダヤ人問題の射程の長さや重さが少しでも明らかにされたことを願うものである。人間存在の究極的意味や罪責意識や虚無意識などを介して、人生に意味や方向を与え、共同の生を豊かにするべく生じた宗教という人間に独特の現象も、イデオロギーとして機能させられるとき、特に「啓示宗教」の場合には絶対観念を基盤としているがゆえに、疎外や排他や抑圧をも絶対化してしまう傾向を持つ。キリスト教唯一絶対主義などは、その典型である。残念ながら、西欧のキリスト教は、そういう傾向を強く示し、権力者の普遍的・絶対的イデオロギーとして機能し、支配者たちの暴虐を宗教的に蔵可する役割を多く担いつつ、西欧社会内部の諸矛盾の原因を、イデオロギー化されたユダヤ教およびユダヤ人に転嫁することによって隠蔽してきた。『ヴェニス商人』も、そういう機能を果たしてきたものの一環として把握される。キリスト教の独善性・排他性へのこうした批判が、他山の石として学ばれ、われわれ日本人が克服しえていない不当な独善性・排他性への自己批判を促すものとして認識されれば幸である。

(一) 「ユダヤ人」という日本語の表現にはいろいろ問題がある。人種概念と混同されるからである。

「ユダヤ教徒」のほうがよいであろうが、ユダヤ教を受け入れない「ユダヤ系」の人々も多くの国々にいるので問題は残る。

国家との関連では「イスラエル市民」とでもいうべきかもしれないが、いうまでもなく、そのすべてがユダヤ教徒ではない。

英語の Jews やドイツ語の Juden はずっと包括的だが、それだけに問題もある。ここではやむをえず特に宗教的含意が強く

ない場合には「ユダヤ人」としておいた。

(2) ドグマという意味は本来「ドケオー」(……のように見える、思われる)に由来するものであり、西欧キリスト教において意味されるようになった「絶対的真理」ではなく、「……と思われるもの」ほどの意味であった。

このことは特に記憶されるべきであろう。K・アームストロング『神の歴史』の「訳者あとがき」を参照されたい。

(3) こうしたキリスト教という宗教に内在する問題をも踏まえて、その歴史や内容の積極的な意味でのクリティカルな吟味が不可欠であろう。そうした視座からの筆者の最近の試みとして『キリスト教を知る事典』(東京堂)をも参照されたい。